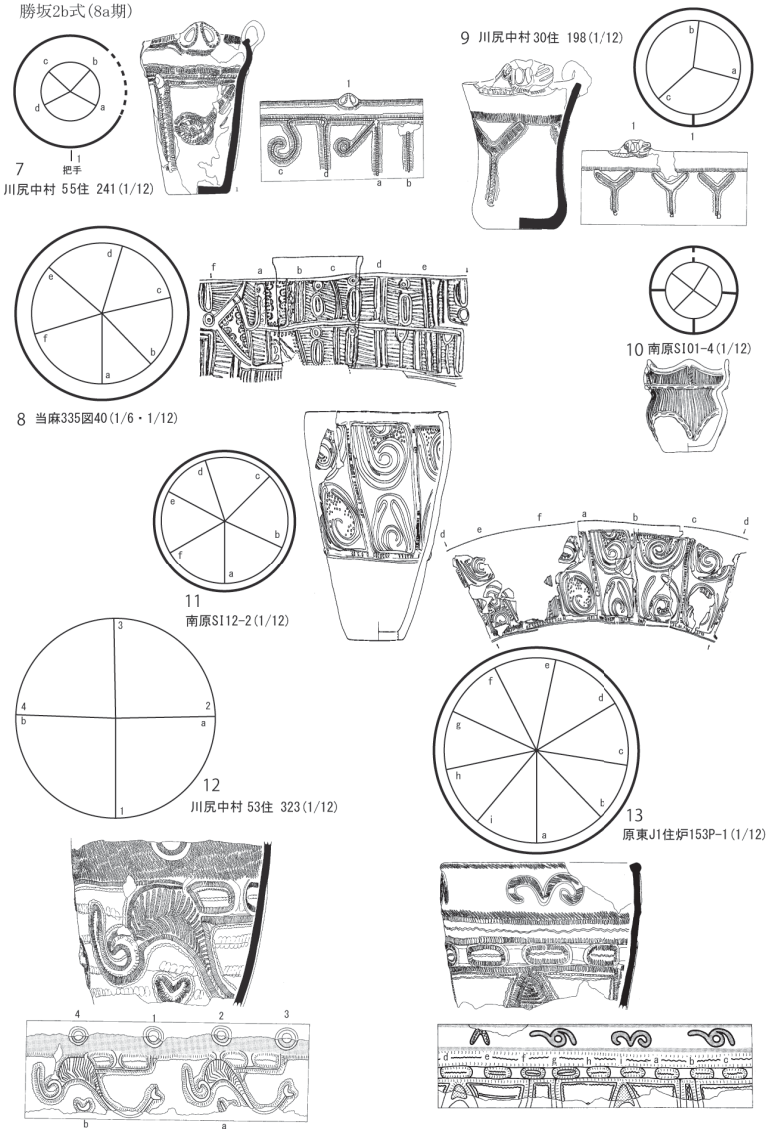

図２　勝坂式期土器割付（2）

とした。

15 は南原遺跡出土，口縁部を欠くが文様帯重帯の深鉢である。最下部の文様帯の楕円区画横帯を胴部文様帯とし，楕円区画の右端を区画点と見なして計測した。b の左側が a の右側と重なり，寸詰まっており 4 単位を意識しながらややいい加減な割付タイプ c とした。

16 は南原遺跡出土，口縁は口唇上に突起を 1 単位配する。胴部上部（Ⅱ文様帯）の半弧状・波状隆線の上端部を計測した。成り行きで施文された割付タイプ d と考えられる。

17 は川尻中村遺跡出土，抽象文系の曲隆線を配する深鉢で口縁を欠く。胴部の半弧状（U 字状）隆線の横位連続の上端右側を計測した。16 と同じく割付タイプ d と考えられる。

16 の南原遺跡出土および 17 の川尻中村遺跡出土土器は，胴部文様の隆線貼り付けの開始部分（図中にスタートと記す）がはっきりわかる例である。その部分から隆線を貼り付けていき廻らせていって，最後にその部分の手前で終わる。左から右へと施文しているところから，大塚達朗（2000）が整理したところの正位の土器扱いで右利きの土器製作者と考えられる。文様割付については，スタート部分からの反時計回りの角度を測った。16 の口縁は例外的に胴部のスタート点からの角度で表 2 に記す。

18 は南原遺跡出土のパネル状嵌め込みの縦位区画系の円筒形深鉢である。口縁部は口唇上に突起を 1 単位配する。胴部は縦区画の隆線垂下の上端を計測した。突起下位から大きく斜めに垂下する隆線が正面性を持ち，割付タイプ b である。

19 は南原遺跡出土の浅鉢で，口縁部に波状隆線を 7 単位分横走させる。割付タイプ d とした。

20 から 42 は勝坂 3 式にあたり，20 から 30 が勝坂 3a 式，新地平編年 9a 期，31 から 38 が勝坂 3b 式，新地平編年 9b 期，39 から 42 は勝坂終末期，新地平編年 9c 期に対応しよう。

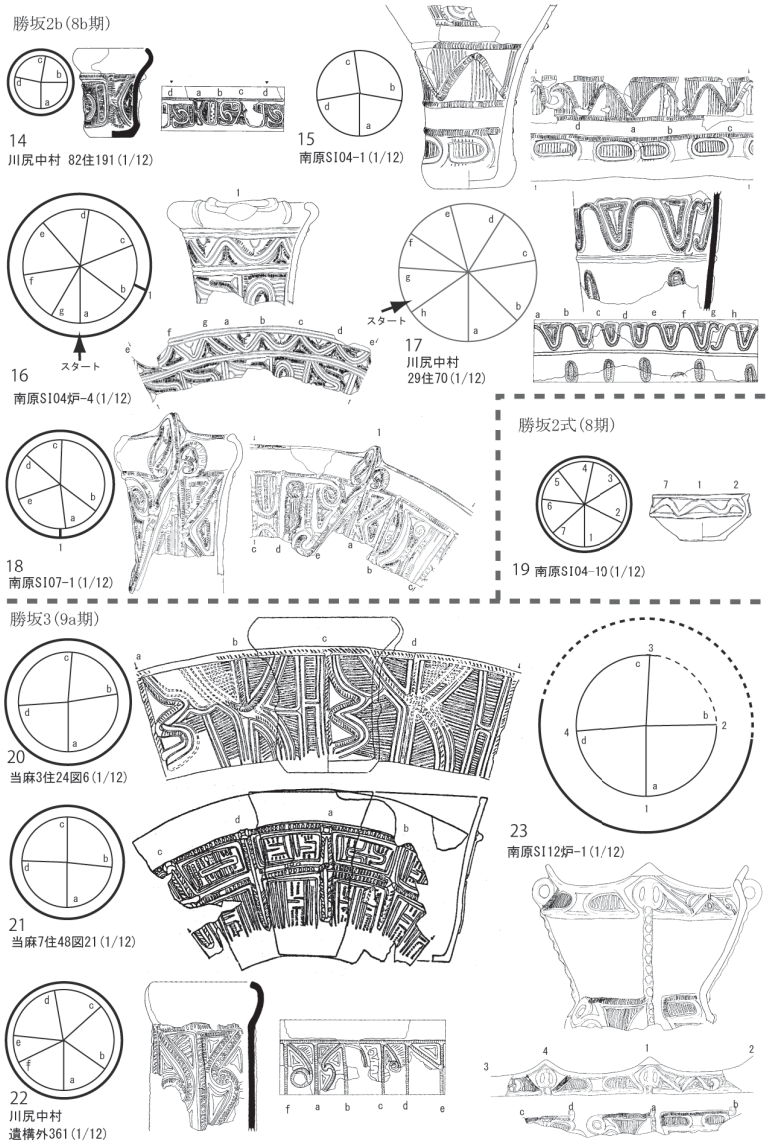

図３　勝坂式期土器割付（3）

20 は当麻遺跡出土パネル状嵌め込み文が人体文的に展開している円筒形深鉢で，口縁部は無文，胴部は縦区画と思われる上下に通った隆線の上端を計測した。人体文的なモチーフ 2 単位（a・b，c・d か）を概ね 4 等分に配した割付タイプ a2 と捉える。

21 は当麻遺跡出土パネル状嵌め込み文縦区画系円筒形深鉢の系譜である。縦位区画の隆線を計測した。概ね 4 等分に配した割付タイプ a2 である。

22 は川尻中村遺跡出土パネル状嵌め込み文縦区画系円筒形深鉢である。6 単位の縦位隆線が垂下するが間隔は不均一で割付タイプ b とする。

23 は「西上タイプ」（中山ほか 2004）に類するような内湾口縁を持つ深鉢で，波状口縁に付随する形で胴部に隆線モチーフを配している。口縁部割付タイプ a2，胴部割付タイプ f とする。

24 は南原遺跡出土の深鉢で，口縁部は方形区画 4 単位と思われるが，胴部は波状隆線を横走させ，5 単位をなす。割付タイプ b とする。

25 は南原遺跡出土の中帯文の深鉢で，口縁部は無文，胴部は円文などを配する。間隔は不均一で割付タイプ b とする。

26 は原東遺跡出土の中帯文の深鉢で，口縁部は無文で口唇上に突起が 1 単位配される。胴部は頸部に楕円区画文が 5 単位配されるが a と b の間が極端に狭く，c から施文をはじめて適当に終えたような施文であり，割付タイプ d と捉える。胴下部には逆 J 字状の垂下隆線が，区画 a および d の下に配される。

27 は原東遺跡出土の深鉢で，26 の中帯文が省略された様な文様構成である。口縁部は無文で口唇上に突起が 1 単位配される。胴部は逆 J 字状の垂下隆線が 2 単位配され，割付タイプ b とする。

28 は当麻遺跡出土の中帯文の深鉢で，口縁部は欠くが無文の内湾口縁であろう。胴部とした中帯文には円文などを取り込む抽象文的な隆線を配し，3 単位の縦位隆線が垂下する。割付に規格性はなく，文様を描出することを主眼としたやり方で，割付タイプ b とした。

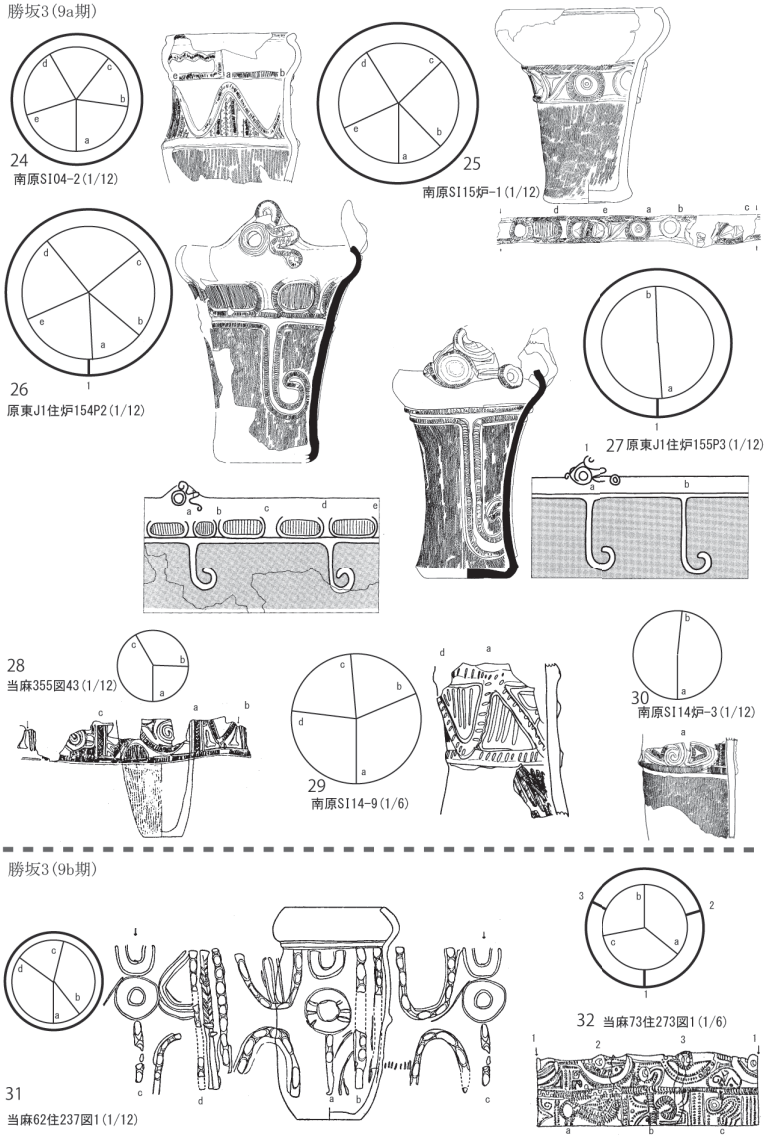

図４　勝坂式期土器割付（４）

29・30 は南原遺跡出土の中帯文の深鉢で，口縁部は欠く。29 の胴部文様帯に当てた中帯文は波状隆線が横位に連続し上下端が横位の区画隆線に接する。結果的におおよそ均等な 4 単位となるが，正確でもなく特に単位数も決まっているように見られない。30 の中帯文は 2 面に円文・渦巻きの文様を配する。ともに割付タイプ b とした。

31 は当麻遺跡出土の「パネル文崩れ」（中山他 2004）と呼ばれる円筒形深鉢で，口縁部は無文である。胴部は間がスカスカでパネル文になっていない縦位文様が充填される。縦に垂下する部分は 1 対のモチーフになっており，4 区画としたが間隔はばらばらで，割付タイプ b とした。

32 当麻遺跡の小型土器で，口縁は半弧状モチーフ横位連続の系譜を引く文様で 3 単位，胴部は抽象文の系譜を引く隆線モチーフがやはり 3 単位である。整合的な配置が意識されているように見える。3 単位の割付がほぼ正確なため割付タイプ a2 とした。

33 は当麻遺跡出土の中帯文の深鉢で，口縁部は無文の内湾口縁である。胴部とした中帯文には 2 段の構成で，下段の文様帯には円文などを取り込む抽象文の系譜を引く隆線モチーフを配しており，モチーフ優先の文様描出として割付タイプ b とした。

34 は川尻中村遺跡の「弧塚タイプ」に類した器形を呈する中帯文の深鉢である。口縁は部分的残存で不明確であるが突起が 1 単位認められる。胴部の中帯文抽象文の系譜を引く横位の隆線モチーフで，割付タイプ b と考える。

35 は当麻遺跡出土の「パネル文崩れ」と呼ばれる円筒形深鉢で，口縁部に隆線によるモチーフが 4 単位配され，口縁部文様割付タイプ a2 である。胴部文様も 4 単位であるが，口縁部の隆線と連結しており，割付タイプ f とした。

36 は川尻中村遺跡出土の小型土器である。口縁部は欠く。胴部は曽利Ⅰ式につながる大柄の U 字状隆線に類する。割付タイプ b である。

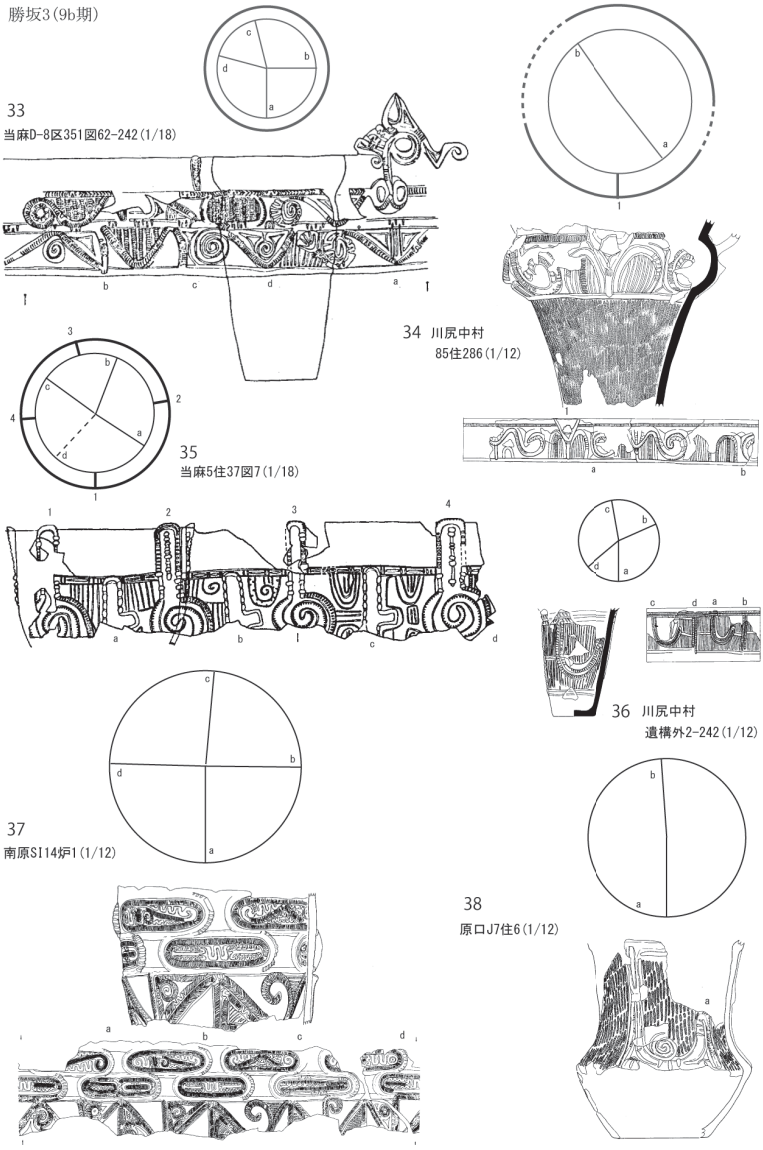

図５　勝坂式期土器割付（５）

37 は南原遺跡の「大型円筒形」（中山他 2004）と呼ばれる器形で，口縁に 2 段重帯楕円区画を 4 単位で横帯，胴部には抽象文を配する。口縁部文様は割付タイプ a2 とした。

38 は原口遺跡出土の屈折底を持つ深鉢で，口縁を欠く。胴部には大柄の曲隆線を 2 単位配するが，明らかに 1 面が主な文様となって正面性を持っている可能性があり，割付タイプ b とした。

39 は当麻遺跡出土の「狐塚タイプ」の深鉢である。口縁部に褶曲文を持つが，その U 字状モチーフは成り行きで施文されており，13 単位を数える。割付タイプ d である。

40 は当麻遺跡出土の中帯文の系譜を持つ勝坂終末期の土器である。口

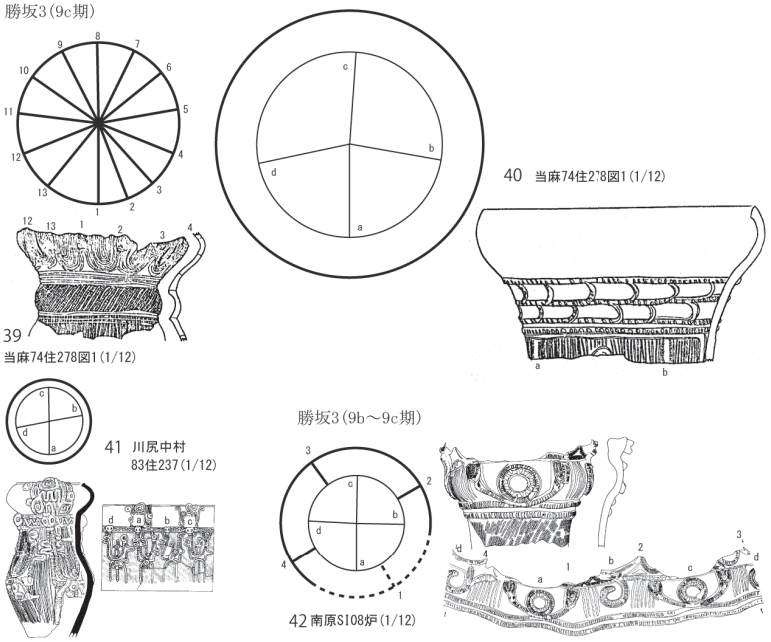

図 6　勝坂式期土器割付（6）

縁部は無文で，胴部に垂下するモチーフを 4 単位配する。割付タイプ a2 とした。

41 は川尻中村遺跡出土の「狐塚タイプ」の深鉢である。口縁部に省略された褶曲文を持つ。胴部は曽利Ⅰ式に連なるような垂下隆線を 4 単位配するが，間隔は不均一で，割付タイプ b と想定した。

42 は南原遺跡出土の中帯文の深鉢である。口縁は欠くが，口唇上隆線で小波状を 4 単位呈すると復元した。胴部とした中帯文の文様帯には 2 組で計 4 単位とした人体文に由来する抽象文が配されるが，この胴部文様はモチーフ重視の割付タイプ b と考えられる。

4　南西関東地方中期前半期の土器文様割付

上記に示したように，南西関東地方の勝坂 2・3 式土器を主体に，文様割付を検討した。五領ヶ台式期の割付については事例が少なく踏み込めないが，勝坂 2・3 式については，明らかにまず大きく主要文様を配置して，他の区画を当て込んでいくように割り付けている。4 区画の把手や口縁部区画など比較的均等な事例はほぼ正確な割付位置を持つ。しかしながら，勝坂 2 式・3 式前半のパネル文などでは，大型把手 1 または 1 対の把手を持つものは，把手や人体文，抽象文を大きく描出するため，結果的に区画の間隔（角度）は不揃いになり，場合によっては区画数がいい加減になるか不均等な割付となる，すなわち主要文様の間を埋め込んでいく，または残りの部分をおおよそ区画する場合には，不均等な区画となっていることが指摘できる。パネル文や抽象文でも，一部に施文上の目印と考えられる刻印を穿つなどマークを付して均整のとれた文様描出を意図していると思われる例もある（小林 2000a-土器 36 例。本稿図 3-14 にも同様な刻印が認められる）が，これらは不均一な割付だからこそ，イメージする文様を素描するために目印を入れているものとも考えられる。

山梨県宮之上遺跡の勝坂1a式（狢沢式）土器の文様割付を検討し，対称形や均等な割り付けと全く異なり，人体文など1面からの文様配置を意識した正面性をもった土器や2面の主文様を配するなど，加曽利E式期とは全く異なる文様割付（割付タイプb）であることを明らかにした（小林2002b）。今回検討した勝坂2・3式期の土器文様割付も同様の割り付け方法を持ち，勝坂式期には，区画配置や対称的な配置，パターンの繰り返しを重視せず，主文様を1面（正面）または2面に大きくみせ，残りの部分を埋めていく手法を採っていることが想定でき，前稿の分析（小林2000a）での文様割付bタイプと捉えられる。おそらくは，加曽利E式期は異なった割付を採用していくのに対し，中期後半でも曽利式前半期には受け継がれていく手法といえよう。

それに対し，阿玉台式土器の割付について若干例ながら検討し，3区画・4区画を均等に割り付け（タイプa），加曽利E式前半期に近い正確な割付をおこなっているものと推定した（小林2002c）。ただし阿玉台式土器については，割付の検討事例が乏しく今後の課題である。勝坂式土器については，小林2000aにおいても事例を検討しており，今後改めて総合的に縄紋中期土器文様割付を検討していきたい。

なお，本稿はあくまで縄紋土器の文様割付の実態を明らかにするためにデータを蓄積するのが第一の目的であり，そこからすぐさまに縄紋土器製作工程の体系化や制作上の技術（工具の推定を含む），文様を描出する際の認識構造を議論するものではないが，土器割付に関する議論を豊かとするために，桜井準也による小林への批判点について簡単に触れておきたい。桜井は，「土器の文様区画と認知構造」（2006）のなかで，小林の土器割付の分析を評価するが，あわせて疑問点も提示している。その一つとして，本稿でも準拠した縄紋の土器割付のタイプa～fが煩雑であり，それは「土器製作者の意識，施文プロセス，結果としての文様単位数の変化や文様の変形・省略という，いくつかの要素が同じ分類に反映されている」（桜井